

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520926

研究課題名(和文) 16～19世紀中国貿易陶磁流通構造の調査研究：東アジア、東南アジア、北米を中心に

研究課題名(英文) A study of Chinese trade ceramics from 16th century to 19th century in East Asia, Southeast Asia and North America.

研究代表者

森 達也 (MORI, TATSUYA)

愛知県立大学・日本文化学部・研究員

研究者番号：70572402

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、16世紀から19世紀を対象に、中国各地の窯址出土陶磁と沈没船引揚げ陶磁、各地の遺跡で発見された中国陶磁の比較研究を実施した。景德鎮窯、章州窯、徳化窯、宜興窯、広東諸窯を調査し、これまで不明確であった18-19世紀の景德鎮窯と徳化窯の製品の差異を明確化したほか、福建・広東産とされていた17世紀前半の粗製磁器が景德鎮窯製品であることを確認、18-19世紀の産地不明の貿易陶磁が広東省の石湾窯や潮州窯の製品であることを明らかにするなど、貿易陶磁の産地同定研究を大きく進展させた。また、アジアや北アメリカで出土した該期の中国陶磁を調査し、中国陶磁流通システムを解明するための基礎資料を得た。

研究成果の概要(英文)：In this study, I investigated Chinese trade ceramics from 16th to 19th century in East Asia, Southeast Asia and North America for making comparative study across ceramics excavated at China kiln Ruins, Chinese ceramics from sunken ships and Chinese ceramics found in the ruins. By making exploration of Jingdezhen kilns, Dehua kilns, Yi Xing kilns and some kilns in Guangdong, I made the difference between 18th-19th century Jingdezhen ceramics and Dehua ceramics clear. And, I disclosed that some Chinese churn ceramics in early 17th century, which was known as Fujian or Guangdong products, are Jingdezhen products. Also, I disclosed that some unknown kilns Chinese ceramics in 18th-19th century are products of Shiw an kilns and Chaozhou kilns in Guangdong. Besides, through making investigation of Chinese ceramics in 16th-19th century excavated at many archeological sites in East Asia, Southeast Asia and North America, I got the basic data for making study of Chinese ceramics trade system.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：貿易陶磁研究 中国陶磁研究 陶磁考古学

1. 研究開始当初の背景

中国陶磁は、8世紀から19世紀にかけて盛んに海外に輸出され、世界各地でその遺品が発見されていることから、世界の交流史を研究する上で極めて重要な研究資料となっている(三上次男『陶磁の道』岩波文庫1969年など)。

その流通範囲は、8世紀から15世紀には、東アジア・東南アジア・西アジア・北東アフリカなど、主にイスラーム商人の活動圏に沿って広がっていた。しかし15世紀中頃に始まったいわゆる「大航海時代」以後、ヨーロッパ人のアジア貿易と新大陸貿易の参入によって、その分布圏はヨーロッパ、さらに新大陸へと広がり、まさに世界的な規模での巨大な流通圏が成立したのである。

本研究は、中国貿易陶磁の分布がほぼ全世界に広がった16世紀から19世紀を研究対象時期とし、該期の貿易陶磁生産窯址出土資料と各地で発見されている沈没船引揚げ陶磁、各地の都市遺跡や港湾遺跡で発見された資料を比較研究し、当該時期の中国陶磁の貿易システムを解明することを目的とする。

これまでに、日本における当該期の中国貿易陶磁研究は、日本貿易陶磁研究会で3回の大規模な研究集会(『貿易陶磁研究7』1987年、『貿易陶磁研究19』1999年、『貿易陶磁研究27』2007年で報告)が行なわれたほか、関西近世考古学、江戸遺跡研究会などによって進められている。これらの研究では、各地の消費遺跡出土資料や沈没船資料の集成や分析が行なわれてきたが、日本では中国貿易陶磁の生産に関する研究はほとんど行なわれておらず、大きな問題を抱えている。

該期の中国貿易陶磁生産地は、景德鎮窯(江西)、漳州窯(福建)、徳化窯(福建)、広東諸窯などが主要な地点であるが、このうち景德鎮窯と漳州窯については近年発掘

調査が進み、製品の年代決定も可能になってきたが、徳化窯と広東諸窯については不明な点が多く残されている。特に徳化窯は、18世紀から19世紀にかけて上質の青花磁器を生産し、多くの製品が海外輸出されたが、同時代の景德鎮製品と非常によく似ているために徳化製品と景德鎮製品の識別基準が確立されておらず、これまでの消費遺跡や沈没船発見陶磁の研究で景德鎮窯青花磁器と分類されてきたものの中に多くの徳化窯製品が含まれている可能性が高いのである。2003年に研究代表者は徳化窯製品と景德鎮製品の分類基準の不備と両者をきちんと識別する必要性を指摘したが(「16世紀から19世紀のベトナムにおける中国陶磁の流通」『海のシルクロードからみたベトナム中部・南部の考古学的研究』シルクロード学研究会 Vol.15 シルクロード学研究会センター 2003年3月、p129-134。)、現時点ではこの問題は解決されていない。さらに、該期の徳化窯製品の編年も確立されていない状況である。また、広東諸窯の製品についても漠然と広東省内のどこかの窯の製品と認識されているだけで、その正確な産地はいまだに確認されておらず、編年も確立していない。2009年に研究代表者は、貿易陶磁生産地としての徳化窯の重要性をさらに明確化したが(森達也「15世紀後半～17世紀の中国貿易陶磁 - 沈没船と窯址発見の新資料を中心に - 」、『関西近世考古学研究17』関西近世考古学研究会、p153-166、2009年12月)、現時点ではその製品の編年確立までは至っていない現状である。

このように、現時点での16世紀から19世紀の中国貿易陶磁の研究は、産地や編年が十分に確立していない状況で各地の消費遺跡や沈没船資料を分析している段階であり、該期の貿易ルートや貿易構造の全容を解明することは困難な状況となっている。

2. 研究の目的

16～19世紀の中国貿易陶磁は世界各地で発見され、東西交流史などの研究や、各地の遺跡の年代を決定する基準資料として極めて重要な資料であるが、まだ十分に研究が進んでいない部分が多い。本研究では、該期の貿易陶磁を生産した、景德鎮窯（江西）、漳州窯（福建）、徳化窯（福建）、広東諸窯などの古窯址と出土遺物の綿密な調査を行なって、産地ごとの製品の差異を明らかにし、窯ごとの編年を確立する。さらに、その基礎データをもとに、東アジア、東南アジア、北アメリカで発見された沈船資料、港湾遺跡や都市遺跡などの出土資料を綿密に分析し、中国貿易陶磁流通の経路、流通媒介者、地域ごとの受容製品の特色などを明らかにして、該期の世界的規模の人間と物の動きを解明する。

本調査研究では、(1)該期の徳化窯製品と景德鎮製品の識別基準の確立、(2)該期の徳化窯製品の編年の確立、(3)広東製品の産地の確認と編年の確立、(4)景德鎮窯製品と漳州窯製品の編年の確認、の4項目の研究をまず先行して実施する。さらに、これらの研究成果をもとにして、太平洋周辺の東アジア、東南アジア、北米地域、具体的には日本、台湾、フィリピン、ベトナム、メキシコの消費遺跡や沈没船で発見された中国貿易陶磁の実見調査と再分類を実施して、それらの生産地の再確認をおこなう。産地の確認と同時に、それぞれの遺物の年代を確認し、それらのデータを基に、各地域の時代ごとの中国貿易陶磁の流通状況を明らかにする。

こうした研究方法によって、これまでの研究よりもはるかに精度の高い水準で中国貿易陶磁の流通状況を明らかにすることが可能となる。具体的には、地域ごとの流通状況の差異、時代ごとの流通する製品と産地の変化、流通する製品の産地の比率とその変化などを明らかにすることが可能となり、

それらを基に、該期の流通ルートの推定や陶磁貿易構造を解明することが可能となる。こうした研究によって、大航海時代以降の世界的な規模での人と物の動きを実物資料によって具体的に明らかにすることができる。

3. 研究の方法

本調査研究では、(1)該期の徳化窯製品と景德鎮製品の識別基準の確立、(2)該期の徳化窯製品の編年の確立、(3)広東製品の産地の確認と編年の確立、(4)景德鎮窯製品と漳州窯製品の編年の確認、の4項目の研究をまず先行して実施した。さらに、これらの研究成果をもとにして、太平洋周辺の東アジア、東南アジア、北米地域、具体的には日本、台湾、フィリピン、ベトナム、メキシコの消費遺跡や沈没船で発見された中国貿易陶磁の実見調査と再分類を実施して、それらの生産地の再確認をおこなった。

4. 研究成果

景德鎮窯製品と徳化窯製品について

江戸時代に日本に最も多くもたらされた清朝陶磁は、景德鎮窯と徳化窯系の製品である。この二つの産地ではともに青花磁器が焼かれたが、その製品の文様はまったく同じパターンのもものが少なくなく、両者の分別がかなり難しい。日本の伝世品や遺跡出土の清朝青花磁器で最も多いのは、仙芝祝寿文や花唐草文、梵字文などであるが、これらの文様は景德鎮窯でも徳化窯でもほぼ同じ描き方で用いられている。また、日本ではあまり見られないが、欧米でペンシルドローイングと呼ばれる細い単線で描かれた唐草文も景德鎮と徳化系の製品は瓜二つである。

これまでの貿易陶磁研究では、底部を型で成形した粗製の青花は徳化窯系、底部がロクロで削り出された上質品は景德鎮といった分類が主流であったが、実際に二つの

生産地の窯址出土品を詳しく見てみるとそのような単純な分類基準では不十分であることがわかる。

徳化窯系の青花の碗や皿は、確かに型を用いて成形するのが一般的であり、型から抜いたままの高台を持つものが多い。こうした製品は一目で徳化窯系の製品とわかるが、すべての徳化窯青花が型成形の底部をもつわけではなく、上質品は型成形ののちに底部を丁寧に削って、景德鎮窯製品と同じような削り出しの高台をもつのである。両窯の製品は前述したように全く同じ文様のものが多い上、使用されるコバルト顔料も共に浙青または浙料と呼ばれる浙江省産の顔料が主であるため青花の発色もほとんど変わらない。胎土についても、一般的に徳化窯の胎土は景德鎮窯よりも白く、光沢感が強いとされるが、徳化窯系製品の中には灰色がかった胎土の製品も少なくなく、均一な見方では分別ができないのが実情である。前節で述べたように、景德鎮窯の製品の中には上質品から粗製品までの質的な差がかなり大きく認められているが、徳化窯系磁器の中にも同じように品質差があり、単に型作りの底部は徳化窯系、それ以外は景德鎮窯といった単純な分別ではなく、それぞれの産地の製品の中での品質差を十分に意識した上で、両窯の製品の分別を考慮しなければならないのである。

筆者が現時点で認識している清朝後期の徳化窯系青花磁器の上質品と景德鎮窯製品の相違点は、以下のとおりである。

徳化窯系の型抜き後に高台を細く削った上質品は、高台幅が景德鎮製品よりわずかに広く、高台端部の釉の削り落としが、景德鎮窯ほど明瞭でない傾向が認められる。ただし、徳化窯系の上質の碗の中には、景德鎮製品と同じような明瞭な削りをもつものもある。

徳化窯系の製品の方が器壁がやや厚い傾

向が認められるが、個体による差が大きく、これだけを基準に分類することはできない。

徳化窯系製品は、釉が部分的に白濁し、釉下に浅い亀裂のような線が認められることがある。ただし、すべての徳化窯青花磁器がこうした特徴を持つわけではない。

底部外面の青花による四角い款銘は、景德鎮のものは角が直角またはやや鋭角に描かれるのが一般的であるが、徳化窯系の款銘は角が丸みを帯びたり、不正四角形になるものが少なくない。

外底部に青花で書かれた「嘉慶年製」や「道光年製」の年款は、景德鎮窯製品にはしばしば見られるが、徳化窯系ではほとんどない。なお、青花の年款は基本的には景德鎮官窯製品でのみ書き込むこと許されており、民窯の製品に多用されるのは道光年間(1821-1850年)よりもあとと考えられる。民窯青花や粉彩で「乾隆年製」「嘉慶年製」の青花年款をもつ製品もしばしば見られるが、その多くは道光年間以降の製品で、偽年款である。

2008年に浙江省寧波の沿海で発見された漁山・小白礁一号沈船からは運搬品として積まれていたと思われる大量の景德鎮窯青花磁器が引き揚げられ、その中には「大清嘉慶年製」銘をもつ花唐草文碗と「道光年製」銘の花唐草文碗が共伴していた。この沈船からは『道光通宝』(初鑄1821年)が発見されていることから、道光年間の沈没年代が推定されている。こうした例から景德鎮窯民窯製品の「乾隆年製」や「嘉慶年製」などの年款は、必ずしも生産年代を示していないと考えられるのである。

椿椿山日記の白泥湯罐の産地について
江戸時代後期の文人画家である椿椿山は、天保8年(1837)9月3日の日記(『椿椿山日記(板橋区立郷土資料館蔵)』)に不思議な形の湯罐の図を描いて「漳(障?)州瓶 灰

色」と添え書きしており、この図と同じ形の椿山所用ではないかとされる白泥湯罐が板橋区立郷土資料館に所蔵されている。この湯罐は注ぎ口と取っ手がねじ曲って同じ方向を向いた不思議な形で、やや粗い灰色がかった白色土を用い、胴部の上下をそれぞれ型で造って胴中央で継いでおり、外面は無釉であるが内面の下部には鉄釉または鉄泥が水漏れ防止のために施されている。日本では伝世品が散見され、京都国立博物館で2013年に開催された『魅惑の清朝陶磁』展でも野崎家塩業歴史館所蔵品が出品されていた。1817年にマラッカで沈没したイギリス船ダイアナ号や1822年頃沈没した中国船(テクシン号)台湾澎湖海域の將軍1号沈船で類品が発見されており、19世紀前半頃に生産され、海外に盛んに輸出されていたことが知られている。

これまで、産地は漳州窯と考えられてきたが、本次研究の現地調査によって白泥湯罐が石湾窯の製品であることを確認した。

交趾水注について

江戸・明治の煎茶の世界で珍重された水注に、交趾と呼ばれる低温の鉛釉がかけられた水注がある。型打ちの造形が特徴で、胴部と口縁部を、左右に二つに分割されて文様の彫り込まれた外型を用いて造形し、これらを貼り合わせて、上げ底の底部を貼り付けて体部を作り、さらに注口と把手を取り付けている。把手には後手と提梁形の上手の二種類がある。胎土はやや灰色がかった白色土で、釉は黄釉と緑釉を多用し、褐釉が用いられることもある。内面には鉄釉または鉄泥が施されている。

交趾水注は、陶磁器研究ではこれまで取り上げられることが少なかったが、1997年に大阪市立美術館が開催した『煎茶・美とのかたち 文人のあこがれ、清風のこころ』展で紹介され、昨年の京都国立博物館

の『魅惑の清朝陶磁』展でも京都・霊洞院所蔵の六角水注が出品されている。伝世品の箱書に「交趾」と書かれたものが多いため、明末に福建南部の漳州窯(田坑窯)で生産されたことが確認されている交趾香合と関連づけられて、明末の製品とされたり、福建南部で生産されたとされることがあるが、この交趾水注も椿山所用の白泥湯罐と同じ広東省の石湾窯で清時代後期に生産されたものである。

石湾窯は唐時代頃から陶磁生産を開始し、明時代以降には広東省西部で最大規模の陶磁産地に発展して今日まで続いている。明時代には褐釉、黒釉、海鼠釉、緑釉などの高温釉のほか低温の鉛釉の製品も作られた。清時代以降にも鉛釉の伝統は引き継がれ、20世紀まで三彩釉の製品が作り続けられている。

煎茶の世界で珍重された交趾水注は、胎土の特徴、型造形の方法、内部に鉄釉を施す技法などが前述した椿山所用の白泥湯罐と共通し、また石湾市街の古窯跡から日本伝世品と類似する三彩水注の蓋が出土していることから、清時代後期に石湾窯で生産されたとして間違いない。

このタイプの石湾窯の水注は、明末の交趾香合と類似した鉛釉が施されていたために、江戸時代後期に日本に輸入された際に「交趾」の名が与えられたのであろう。清後期の「交趾」を明末の「交趾」と区別するために、江戸後期に輸入された中国陶磁の箱書にしばしばみられる「新渡」の語を用いて、「新渡交趾」と呼ぶことを提唱したい。

なお、江戸時代後期に青木木米をはじめとする京焼の陶工が盛んに作った交趾写しの煎茶器は、江戸時代に前期に輸入された明末の交趾を写したのではなく、ほぼ同時代に輸入されていた新渡交趾を模したものである。また、源内焼もこの新渡交趾の影

響を強く受けている。江戸後期の交趾写しは、明末の呉州赤絵の写しが江戸後期に盛んに作られたのと同じように、江戸後期に形物香合として人気が高かった、明末の交趾をアレンジして生み出されたと漠然と考えられていたが、文人趣味が隆盛に伴い再び輸入が盛んとなった同時代の清朝陶器を写していたのである。

これまで清朝後期の中国陶磁から日本陶磁への影響は、江戸後期の肥前や瀬戸・美濃、京都などを中心とした磁器製品を中心に論じられていたが、ここで挙げたように新渡交趾(石湾窯鉛釉陶器)からの影響も、日本陶磁史を考える上では無視できないものである。

その他の陶磁器

清朝後期の結晶釉の海鼠釉や青釉がかけられた製品には、宜興窯と石湾窯の製品があり、宜興窯の製品は紫砂壺(朱泥急須)と同じ赤褐色胎土で、石湾窯は白色や灰色の素地であり見分けが付きやすい。

褐釉や黒釉のかけられた茶壺形の四耳壺は、明後期のいわゆる呂宋壺から清朝の製品まで大部分は石湾窯の製品である。

日本で朱泥と呼ぶ中国製の紫砂壺(急須)は伝世品も出土品も少なくない。こうした中国製紫砂壺は一般的に宜興窯とされているが、広東省の潮州窯で生産された紫砂壺は、外見が宜興窯紫砂壺とほとんど同じであるため一見ただけでは区別が付かない。宜興窯紫砂の胴部は口口造形ではなく「打身筒」と呼ばれる粘土板を筒状にしてへうで叩いて球形にする技法による。このため、胴の内面に粘土板を継いだ痕が縦方向に場合が多い。一方、潮州窯紫砂壺は口口成形によっており、内面に口口目が残る。

消費遺跡の調査

上述したような窯址調査の成果を基に、日本、台湾、フィリピン、ベトナム、メキシコでの貿易陶磁出土状況の確認調査を実施した。ベトナムでは宮城遺跡であるハノイのタンロン遺跡の出土資料、メキシコではメキシコシティのテンプロ・マヨール出土資料、台湾北部の十三行遺跡、台湾南部のゼーランディア城、フィリピンの沈船資料、マニラ市街遺跡出土資料など該期の中国貿易陶磁を研究する上で極めて重要な資料を実見調査し、該期の中国陶磁流通システムを解明するための基礎資料を得た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

森達也「清朝輸出陶磁の生産地について」『陶説』734号、査読無、日本陶磁協会、2014年5月、37-46頁。

森達也「日本出土的中国青瓷」『東亜青瓷学術論壇論文集』、査読無、新北市鶯歌陶瓷博物館(台湾)、2013年12月、130-144頁。

[学会発表](計3件)

森達也「福建・広東・江西の清朝陶磁生産」『第34回日本貿易陶磁研究集会』日本貿易陶磁研究会、於：青山学院大学、2013年9月29日。

森達也「日本出土的中国青瓷」『青韻流動東亜青瓷学術論壇』主催・会場：新北市立鶯歌陶瓷博物館(台湾)、2011年11月26日。

森達也「華南三彩の研究 現状と課題」『第32回日本貿易陶磁研究会(大分大会)』会場：大分県立芸術文化短期大学、2011年9月25日。

6. 研究組織

(1)研究代表者

森 達也(MORI TATSUYA)

愛知県立大学・日本文化学部・客員共同研究員

研究者番号：70572402